

白馬では、この冬も雪は少ない。11月23日にオープンを予定したスキー場はすべて延期され、12月中旬になってもゲレンデは全面白くならなかった。上部は新雪があっても圧雪したら薄くなって、とても滑られる状態にはならず、下部で人工降雪機によってかろうじて営業ができた。クリスマス・年末年始は何とか滑ることができたが、1月中旬になって、またまたブッシュが現れている。今年は春が早いのではないかという声もある。

年々降雪量が少なくなり、生活するには楽ではあるが、宿泊事業者にとっては死活問題である。車の出し入れのため、出かけるときに除雪、帰ってきてからも除雪という日はほとんどないのはありがたい。新しく購入した除雪機も活躍することが少ない。例年なら4時頃家の前の道路を除雪する大型重機の音で目をさめるが、そんな日はほとんどない。今月末から2月初めが最も冷える時期であるが、このままではどうなるかわからない。

昨日14日、八方ゲレンデ最上部（八方池山荘）から滑ってきたが、新雪がないため春スキーの時のように凍っている。なんとかゴンドラ基点までは滑走は可能ではあるが、最下部では土が見えている。

幸いスキーでの大きな事故や冬山の遭難はいまのところ少ない。第一、今年の白馬は鉛色の空にならず、雪雲ではなく、普通の曇天の日が多い。数日前、朝の放射冷却で家の前の温度計はマイナス16度という異常に冷えた日があり、車内に置いていたサイダーが凍っていた。晴れる日も少なくはない。

それにしても外国人が年々増加している。オーストラリアだけではなく、近年はアジア系の急増が顕著だ。リフトで日本人だと思って話したら反応がない、外見は日本人と区別できない台湾・韓国そして東南アジア。エコーランドという通りは、ほとんどが黒いウェアを着た外国人が道路の両側にあふれ、通行する車は徐行しなければならない。家の前の道路をスキーで堂々と滑りながら移動して行った。ゲレンデで滑っているのも、リフトで働いているのも外国人が多い。日本の若者グループにはめったに遭遇しない。外国人が宿泊する宿が急増し、10年後の白馬村はどうなっているのか。

インバウンドに頼らざるを得ない観光地。喜んではいけないはずだ。外国人観光客を呼び込むのはよしとしても、日本の若者は時間的にも金銭的にも余裕がなくスキーどころではない現実を改革しない限り、日本の将来は明るくならないのではないだろうか。少子化と根はひとつ、為政者はそのことを真剣に考えなければならない。（かつては「道の駅」などに車中泊して滑っていた若者も少なくなっているようだ）